



平成28年度  
会報第1号

発行・編集

鹿児島県教頭会

〒892-0836

鹿児島市錦江町2-16

鹿児島県公立小・中学校

教頭会会館県教頭会事務局

TEL 099-226-8268

FAX 099-822-5580

## 会長就任のあいさつ



鹿児島市立清水中学校  
会長 川池 省三

去る五月十日に開催されました県公立小・中学校教頭会委員会において承認をいただき、会長に就任することになりました。日々責任の重さを感じながら、微力ではありますが、精一杯取り組んでいきたいと思っております。皆様方のご支援とご協力をよりしくお願い申し上げます。

本年度の県教頭会会員数は七二五名、うち新任の教頭先生方は六四名です。学校の統廃合の影響もあり、近年会員数は減少傾向であります。そのような中、本県の教頭会の運営体制や研究大会への取組とその成果については、他県から高い評価をいただいています。

このことは先輩方が、これまで地道に積み上げてこられたものに新たな視点を加え、それを検証しながら、毎年見直しをしてきた結果だと思えます。このことが、それぞれの学校や地域、児童生徒に還元され、本県教育に寄与しているものと確信しております。

教育界を取り巻く社会情勢が急激に変化する中、私たちが教頭は時代の要請や国の動向を把握しながら、教育において忘れてはならない「不易と流行」を念頭に置き、学校運営に携っていくことが大切だと思っています。私事になりますが、かつて県外交流で三年間岐阜

県の中学校に勤務し、全国どこへ行っても子どもたちのもっている素直さや明るさは何ら変わらないことを実感しました。しかし、子どもたちを取り巻く環境は、情報端末機器の急速な発展と普及による問題や、家庭の貧困等で十分な教育を受けられないなど多くの課題が山積しています。私たち教頭は、子どもたち一人一人が等しく教育を受けられる環境づくりに努めることが大切だと思います。

今年度の研究は、全国公立学校教頭会第十一期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」の三年目にあたります。この二年間の取組で明らかになった全国大会の研究成果を生かし、課題等を解決する道筋を明らかにし

教育界の動向や時代の変化に柔軟に対応できるように努めることが求められています。私たちが教頭は「職能研修団体」としての職務の専門性を高め、幅広く教育課題に対応する力を要求されています。今年度は更に会員相互の連携を深め、新たな教育課題解決のために精一杯取り組んでいきたいと決意を新たにしています。そこで、毎年次のようなことに

重点を置いて本教頭会を進めています。

第一に、昨年度本県で実施された第五回九州地区公立学校教頭会研究大会での取組の成果を今年度第五回を迎える県教頭会研究大会に生かし、地区の組織や研究体制を取り組みやすいように整えていきたいと考えています。日々の職務を遂行しながら研究大会へ向けての準備を、それぞれの地区の中で連携を取って進めていくことが大切だと思っております。

第二に、全国大会や九州大会、各種研究会への積極的な参加を通して有益な情報を収集し、県教頭会のホームページを充実させていきます。会員の皆様へ最新の教育界の動向を提供していくことで、教頭同士の更なる連携の促進に繋げていくように努めて参りたいと考えています。第三に、教頭の処遇改善に向けた調査活動に努めるとともに、県教育委員会や県連合校長協会、全国公立学校教頭会等の各種団体との連携を強化し、要請活動が続けて参ります。

第四に、昨年度の研究大会九州・鹿児島大会の反省をもとに、今年度の研究大会を継続した取組として運営して

いくことです。今年度は、九州大会が沖縄で開催されます。六月の総会で、沖縄の事務局の先生方が鹿児島大会の運営を参考に、沖縄県の全教頭が運営に携わる大会にしたいという強い思いを伝えられました。また、その席で、熊本地震への支援についての話し合いもなされ、「九州は一つ」を合言葉に、全九州の教頭会で被災した熊本県と大分県に募金活動等を通して支援していくことが決定いたしました。

最後になりましたが、様々な教育界の難局を乗り越えていくためには、教頭先生方これまでの経験と建設的なご意見が必要だと考えております。県教頭会は、今後も広く会員の皆様の声を聞かせていただき、それを生かしながら相互の連携を深め、充実した活動を進めていきたいと考えております。平成二八年度の各学校における教育活動が充実し、本県教頭会が順調に営まれ着実に前進することを祈念申し上げます。就任の挨拶といたします。



## 随想

「やるべきこととはちゃんとやる」

日置市立和田小学校

田平奈保美

この言葉を本校の今年度の子どもの合言葉にしてから、早いもので一学期が過ぎようとしている。

金峰連山の北面の麓に位置する和田小学校に赴任して一年と十か月。学校長をはじめとする九名の職員、保護者や地域の方々、そして素直な十七名の子どもたちに支えられて、教頭としての日々の職務に少しずつの達成感を得られつつある。

なぜこの合言葉なのか。子どもたちには学校でも家庭でも、

「廊下は走らない」

「使ったら片付けなさい」

「ゲームばかりしない」

「勉強しなさい」

等問題場面への対処として小言を言ってしまう現状。そして、なかなか改善が見られないからますます叱りたくなってくるという悪循環。そこで、子ども自ら

考え自主的・自律的取組を促すため、この合言葉に決めた。

私は、この合言葉を唱えながら自分の職務に置き換える。教頭として、やるべきことはちゃんとやっているだろうか。私の場合、この「ちゃんと」というところがかぎだ。私が管理職になったとき、尊敬し憧れていた女性校長先生から言われた言葉がある。「作業をしない。仕事をしなくちゃ」と。

当時は、作業と仕事の区別が分からなかった私だが、今では分かる。やるべき職務に自分らしさや少しの改善を加えて取り組む。それが仕事だと。今の私にできることは何か。今日も合言葉を唱えながら笑顔で私らしく仕事をしよう！

## 私の勧める一冊の本

### 追憶のルノワール

著者 梅原 龍三郎  
発行所 養徳社  
鹿児島市立桜島中学校  
松下幸男

学ぶ意欲や動機付けは、どのように生まれ、高まり、行動として表れてくるのか。一人の画家が綴った回想録である本書には、その問いに答えるかのように心の動きとともに学びの姿が記されている。

著者は日本近代洋画の巨匠として明治から昭和にかけて絶大な人気を博した梅原龍三郎。本書では青年梅原と印象派の巨匠ルノワールとの出会いと交流が梅原の視点で書かれており、美術好きには興味深い資料でもある。

梅原は1908年二十歳の時に渡仏し、既に大家となっていたルノワールの作品と出会う。そのときの衝撃を「此の画こそ私が求めて居た、夢見て居た、そして自分で

成したい画である。

かゝる画を見る事が出来てこそかく遠く海を越えてこゝに來た価値があつた」と心を躍らせたという。その後、パリの画廊や美術館を巡りほぼ全てのルノワールの作品を見尽くすと、次は画家本人に直接会わなければならぬとまで思いを募らせ、

迷惑かもしれないと葛藤しながらも「さあさあ奮発せん。私は彼に見られるに値する、私は彼の芸術をあまりに愛する、彼はそれを知らねばならぬ」と、突然画家のアトリエを訪ねている。かなりわがまま行動ではあるが、こゝまで思い込める心理状態は、自分自身では経験がないため、ある意味うらやましい。夢を実現させた画家の体験で、あまり参考となるものではないが、ここには未知の表現・体験との出会いによる好奇心の高まり・内的な学びの動機付けがある。外的な動機付

けが多い自身の学びからすると梅原のような経験のないことが恥ずかしい気もするが、振り返ってみると学校での教育活動も教頭としての職務も、そして人生までも未知との出会いによる好奇心がきっかけだったかもしれないと改めて考えさせられる。梅原のようにはいかないが、日常のささやかな未知との出会いを大切に、学び続ける意欲を持ちたいと思える一冊である。

### 椎の木の間

著者 水上 勉  
出版社 中央公論社  
伊佐市立湯之尾小学校  
中山克彦

わたしの初任校は、曾於北部の山村にあった小規模校で五年間勤務した。この「椎の木の間」に出会ったのもこの頃である。

この作品は、作者・水上勉の経験による実話に基づいており、水上は「渡政三」という代用教員として登場する。物語の舞台である分教場は福井県の辺境の地。昭和十九年から二十年というまさに戦争が熾烈を

極めていた時代。しかも、教員の資格もない素人が、四年が一緒に勉強する複々式学級を担当するのだ。その中には疎開してきた子や外国籍の子もいた。そして、渡が赴任するまでは登校すらさせてもらえなかった知的障害のある女の子も。タミコというその子を学校に迎えるところから渡の活躍が描かれる。分教場では、雨の日だけ授業をし、日中は路採り・芋の葉穫りや野鳥を捕ることに汗する日々が続く。その

ような大変な生活を共にする中で、渡と子どもたちは心をあたため合っていく。悲しいことも起こる。松井訓導という女性教師が吹雪の中分教場に向かうが、山道で遭難し、命を落としてしまう。抱えていた風呂敷包みの中には、子どもたちが縫い取った四枚の雑巾があった。

この本は、新刊でも話題の本でもない。しかし、教師魂を揺さぶる。ぜひ多くの方に読んでほしい名作である。

## 自由投稿「受けの美学」

鹿児島市立宇宿小学校  
東條睦宣

高校下宿時代からの大のブレスファンである。当初は下宿のおばあちゃんや下宿仲間と一緒にタイガーマスクの華麗な四次元殺法、アントニオ猪木の燃える闘魂に心を奪われていたのだが、いつしか別の角度からの大きな魅力にとりつかれるようになった。

でも逃げずに受けてファイティングポーズをとり、倒れない強さを鼓舞する。そこに、「受けの美学」を見いだすようになった。「勝つ」というより「負けない」精神の塊が見える思いがするからだ。教頭という立場は、この「受けの美学」に通ずるように思えることがある。

子どもへの指導、保護者や地域の方への対応等々。そんな時、メ切間際の報告物事務作業を深くあきらめ、舞い込んできた業務にじっくり正対しようと覚悟を決める。そして、誠意をもって相手の話を聴き、まずは受ける。そんな懐の深い「受けの美学」で業務にあたれる自分でありたいと思う。この夏、新日本ブレスが鹿児島にやって来る。熱い魂と「受けの美学」を堪能しに行こうかと目論んでいる。

## 新任教頭雑感

「初心忘るべからず」

奄美市立赤木名中学校  
上之園善孝

本校は、奄美市北部の笠利町の中心にあり、校区内には奄美空港や奄美パークがあり風光明媚な土地柄である。全校生徒は、百十一人で奄美大島内では比較的規模が大きな学校である。「よし、がんばるぞー」と新たな気持ちで赴任し、校長から丁寧な指導をいただきながらも、次から次へと押し寄せてくる公文の処理、様々な報告物、数多くの地域行事に、疲労感と少しの充実感が混在する毎日……

ならず、迷惑をたくさんかけた。しかし、生徒の頑張り、保護者の熱いバックアップ、島内の顧問の団結力により、何とか、最後までやり通すことができた。そのような経緯で始めた野球が自分を助けてくれていると感じた瞬間、教頭職に就いたばかりの今の自分の状況が野球の指導を始めた頃に似ているなと気付かされた。

世阿弥いわく「初心」は最初の志にあらず、節目、節目で考えることが初心であるそう。今がその「初心」。明るく元気に誠実に校務にあたりたい。

そんな折、野球の部活動に参加する機会があった。初めてグラウンドに立つ、誰かまだよくわからない私の話を子どもたちは、真摯な態度で聞きキビキと動いてくれたのでノックバットを気持ちよく振ることができた。

それから毎週末、時間が空けば、大会や練習に顔を出すようになり、生徒・保護者・地域との距離感をグッと縮め赤木名中に馴染むきっかけをつくることができた。

野球との出会いは、前々任校の徳之島である。初めて野球部の顧問になり、勝手がわか